

12～15 歳の子どもへの新型コロナウイルスワクチン接種の手引き 『新潟県医師会は、子どもへのワクチン接種を推奨しています』

新潟県医師会

12～15 歳の子どもに対して、新型コロナウイルスワクチンをどのように接種したらよいのか、その考え方や対応の仕方をまとめました。今後の接種の参考にしてください。

● ワクチン接種のメリット・デメリット（別紙リーフレットあり）

事前に保護者と子どもに情報提供をして、あらかじめ考えてきてもらう。

1-1) ワクチンを接種するメリット

- ・新型コロナウイルスに感染しにくくなる。
- ・万が一感染しても症状が出にくくなり、また周りの人にうつしにくくなる。
- ・これからの授業や部活動、旅行などへの行動制限が緩和される可能性がある。

1-2) ワクチンを接種するデメリット

- ・ワクチン接種後、数日間は肩の痛み、頭痛、倦怠感、発熱などの副反応が出ることがある（特に2回目の接種後に頻度が高い）。
- ・心筋炎・心膜炎のリスクがある

米国では、2回目の接種後、16-39歳の100万人中12.6人に軽症の心筋炎・心膜炎が認められた（尚、新潟県の12-15歳人口は令和3年1月1日時点で約7.4万人である）。

2-1) ワクチンを接種しないメリット

- ・ワクチンの副反応がない

2-2) ワクチンを接種しないデメリット

・新型コロナウイルスが流行している限りは、マスク、手洗い、換気などの感染対策以外には追加の対策ができず、感染リスクを更に減らすことができない。

- ・感染した場合、
 - 稀ではあるが重症化のリスクがある。
 - 周りの人にうつす可能性があり、2週間程度、隔離される。
 - 味覚、嗅覚障害が起こり、それが遷延する可能性がある。
- ・自分が感染する、人に感染させるリスクから、今後も行動制限を継続する必要がある。

● ワクチン接種前後の対応において、子どもで特に気をつけるべき点

- ・特に思春期では、予防接種ストレス関連反応が発生しやすい。これを発症しやすいリスクとして、注射への不安が強い、起立性調節障害を持つなどがあげられる。
- ・ワクチン接種前後の不安、恐怖などのストレスを契機として、血管迷走神経反射が起こり、失神することがある。
- ・周囲の子どもの様子などの影響を受けて連鎖して生じることもある。
- ・予防するためには、下記のこと重要である。

- (1) 事前にワクチン接種に関する十分な説明を行い、不安の除去に努める
- (2) 落ち着いた雰囲気の中でワクチン接種を行う
- (3) 接種後 15 分は椅子に腰掛けるかベッドで臥床する
- (4) 失神を起こす恐れがある場合には、あらかじめベッドで臥床した状態でワクチンを接種し、接種後 30 分間は体調の変化を観察する。

● 集団接種を行う際の注意点

- ・学校などの会場で行う一般集団接種とし、学校医を中心に医師、看護師、事務職などが担当する。
- ・子どもや保護者への十分な説明のための時間を確保することは、接種当日だけでは困難なため、事前に説明文書を配布し、読んでおいてもらう。
- ・接種後に起こりうる副反応に対して、迅速な対応が可能な体制を準備する。具体的には、アナフィラキシーに対する処置やその後の搬送先医療機関の選定など。
- ・接種当日帰宅後の体調不良時の対応もあらかじめ決めておく（かかりつけ医へ受診など）。
- ・接種を希望しない子どもの心理的負担を減らし、また、特定されにくくなるように、放課後や休日、長期休業期間などに接種日を設定する。
- ・特別支援学校など、重症化リスクとなす基礎疾患をもつ子どもが複数在籍していて、それぞれが個別接種のためにかかりつけ医を受診する負担が大きい場合には、集団接種を積極的に考慮してもよい。

● ワクチンを接種しない子どもが差別やいじめを受けない配慮が必要である

- ・ワクチン接種は強制ではない。
- ・様々な理由でワクチン接種ができない、希望しない人もいるので、その判断は尊重されることを子どもと保護者に理解を求める。

(参考文献)

日本小児科学会予防接種・感染症対策委員会 新型コロナワクチン～子どもならびに子どもに接する成人への接種に対する考え方～（2021年6月16日）

・12歳以上の小児への新型コロナウイルスワクチン接種についての提言。日本小児科医会（2021年6月16日）

・事務連絡。新型コロナウイルス感染症に係る予防接種を生徒に対して集団で実施することについての考え方及び留意点等について（2021年6月22日 文部科学省・厚生労働省）

・予防接種後の失神に対する注意点について。日本小児科学会予防接種・感染対策委員会 声明（2009年9月27日）

監修：新潟大学小児科 2021年6月30日作成